

マスコミュニケーション史への一考察(II)

—コミュニケーションチャネルとしてのコーヒーハウスと Library—

中 島 純 一

はじめに

本稿は、近代マスコミュニケーション史において重要な役割を果たしてきた読者層の出現という現象に注目し、前稿に続くものである。既にみてきたように、19世紀中葉から末期にかけての内的要因の高まり…教育の普及によるリテラシー層の拡大、政治的及び娯楽的モウティブの定着…等、並びに外的要因の高まり…Reading Matter 全般の価格の低下、発行部数の飛躍的増大…等により、大衆とプリントメディアの距離はますます接近し、大衆読者層到来へとつながるのである。

さらに、読者層形成過程の目安である読者と読み物との距離をみる場合に、内的要因と外的要因との2極構造に加えて、読者と読み物とが実際に出会う「接点」に注目される必要がある。特に、18世紀から19世紀にかけて、読者層形成に大きな役割を果たしたと思われる特有の「場」—大衆へ新聞・雑誌・単行本等のアクセサビリティを提供した「場」—が、存在していた事実は重要であり、その意味するところは大きい。

1. コーヒーハウスと読者層の形成

大衆が読者層へ転化するのを妨げた大きな要因は、そのリーチ外にある

価格の問題であった。これに対処するための方策が、“borrowing”の概念の導入であり、この時期制度化されたコミュニケーションチャネルとして出現してくる。この代表的形態が、コーヒーハウスであり、図書館群であった⁽¹⁾。これらのチャネルが、大衆のリーチ内の低廉な貸し賃で、読み物を差し出したことは、本や雑誌が高価であった状況を考えれば、その意味するところは大きい。本章では、これらのチャネルを基本的に大きく2つに分け、新聞、雑誌にアクセサビリティを与えた「場」としてのコーヒーハウスと、単行本へのアクセサビリティを与えた「場」としての図書館群に分けて考察していく。本節では前者を、次節では後者を扱う。

コーヒーハウスの歴史は古いが⁽²⁾、それが社会的な意味をもってくるのは、17世紀からであり、ジャーナリズムの発生と密接な関係がある。コーヒーハウスとジャーナリズム及び政治的モウティブを有する読者層との相関を把握するためには、コーヒーハウスの果たしてきた役割および機能をみなくってはならない。

新奇な飲み物として、茶より後れてイギリスにもたらされながら、より早く普及した「コーヒーの歴史は、単なる飲み物としてのコーヒーそのものよりは、それを飲む場所つまりコーヒーハウスの歴史」⁽³⁾であった。海外貿易の発展、植民地の拡大といった国力の増大に伴う世界観の拡大は、人々に新しい興味、見知らぬ世界への願望や好奇心をつのらせ、未知の世界に対する話題や討論を活発にしたが、国内でも王権の衰退、トーリー・ホイッグ両政党の対立等…に象徴される政治状況から生まれた政治意識の高揚は、対話や討論の気運を高めた。エリザベス朝以来、このような気運は、人々のよく出入りする場所…劇場あるいは居酒屋などを中心に芽生えてきた。しかし劇場に行くことが、上流階級に限られた行動であり、あるいはまた居酒屋が酔いと喧噪につつまれていたことを思えば、議論や討論の場としては必ずしも適切ではなく、その意味でコーヒーハウスの出現してくる余地は十分にあったといえよう。ここに「半ば社会的で、半ば知的なセ

ンターであり、そこではニュースやゴシップ、軽い議論やウィットに富んだ会話が行われる」⁽⁴⁾場所即ちコーヒーハウスの出現をみるのである。それは、かつて人々の出入りしていた場所—劇場・居酒屋・集会所—で行われていた「ニュースや世間話の継承者」⁽⁵⁾となったのである。

店に入る際に、1ペニーの料金を払うだけで、身分の別なく開かれていたコーヒーハウスは、そこにおける「身分差を解消した」⁽⁶⁾。従って、階級・身分に関係なく自由に発言され、討論され、集まる人々の意識・意見の形成に重要な役割を果たした。「近代的新聞」が、ニュースの伝達・意見の場という性格とともに、世論の機関という性格を有していたことを考えれば、コーヒーハウスの中に既にその萌芽があったといえよう。「日刊新聞などの芽がふいたのは、まさにタバコとコーヒーの香りの真只中においてであった」⁽⁷⁾。コーヒーハウスの中でジャーナリズムが育まれてきたとすれば、初期のジャーナリズムという言葉に包括的に内包されている文学の普及に貢献したことも見逃せない事実である。特に読者との観点からみた場合、その距離が縮まったこと—即ち「著述家と読者とが一堂に会し、両者は対話の関係に入るようになり、相互に大きな影響を及ぼしあうようになった」⁽⁸⁾—点は、注目されなければならない。コーヒーハウスの出現はユーザーが評するごとく、著述家を書齋という孤立した世界から大衆の世界へ連れ出したのであり、ひいては著述家を職業として成立させるのに貢献したのである。結果的にはコーヒーハウスの衰退と共に、著述家と読者の距離は再び遠くなるのであるが、コーヒーハウスに代わって日刊紙や評論紙等のジャーナリズムが、両者を媒介するようになっていく。いわばコーヒーハウスがジャーナリズムの前史的役割を果たしていたのであった。

コーヒーハウスが、ジャーナリズム、文学という読者層形成に必須のジャンルの成立に貢献する一方で、経済上の取引や情報交換の場であったことも注目しなければならない。市場の拡大や商業の発展が情報への要求を高めるにつれ、コーヒーハウスに集う商人クラスによって、そこでの情

報交換・商業上の取引きとしての機能が強化され、本来のすがたと異なったコーヒーハウスが出現してくる。例えば、Jonathan' Coffee Houseにおける株式取引、ロイド (Lloyd's) の海運業に関する情報と“News”誌の発行などである⁽⁹⁾。このようなコーヒーハウスの種々の機能は、やがてジャーナリズムにあるいは商業界の各部門へと吸収されていくのである。

コーヒーハウスが、ジャーナリズムを育みかつ情報センター的役割を果たしていたということは、それを消費する層—読者層、情報利用者層といった集団の存在を表している。コーヒーという海外発展の産物たる新しい飲み物を通して、娯楽および情報センターとしてのコーヒーハウスが都市—特にロンドン—における市民生活に溶け込んでいくのであり、まさに「ロンドンのコーヒーハウスは、社会生活の中心だった」⁽¹⁰⁾のである。都市部における市民生活とコーヒーハウスとの密接な結びつきは⁽¹¹⁾、例えばアシュトンが言うように「人々は、コーヒーハウスに典型をみるように、各種の組織の中で成長してきたのであった」⁽¹²⁾ことを考えれば明らかであろう。このようにコーヒーハウスが市民との生活に密着していたことは、17世紀末から18世紀初期の最盛期にかけて、約2000軒(ロンドン)、衰退期の1840年頃に1600~1800軒(ロンドン)あった⁽¹³⁾という数量的側面からもうかがわれよう。

本来コーヒーハウスは、国王を頂点とする旧体制の階級性から、新興ブルジョワジーを中心とする新しい身分制への移行という状況の影響を受けず、「諸階級出身者のルツボ的性格」⁽¹⁴⁾であるところに、その意義があった。身分・地位にかかわらず、自由な討論・意見の形成という民主的“場”であったコーヒーハウスは、必然的に同質的意見・意識をもつ人々の集団へと転じる可能性があった。実際17世紀中頃に始まったコーヒーハウスは、18世紀に入ると同属意識をもつ人々の集団と化したのであった⁽¹⁵⁾。コーヒーハウス内における異質なレベルの意見は、統一した意見の形成(代表的意見)—裏を返せば、同質のレベルの意見形成へと導かれるのであり、そ

のコーヒーハウスのもつカラーおよび意見の方向性に沿って、その利用者層が同質化されていくのは、ごく自然の結果といえよう。このような利用者層の同質化によってコーヒーハウスは、次第に「閉鎖的な傾向の“クラブ”へ移行していく」⁽¹⁶⁾のである。革命的急進派が名誉革命100周年を記念してつくった「革命協会」、ハーレーの「王立学士院クラブ」、ジョンソン博士を中心とする「文学クラブ」等、そこに集う市民の意識・志向性が、クラブという一種の同属集団を形成していったのであり、往々にして利用者層の階級構成を固定化したのであった。このような流れは、「所属しているクラブによってその人の社会的評価が決まるというほどで、いわば既に確立した階級秩序を、維持・強化する機能」⁽¹⁷⁾をもつようになってきたことを意味している。解放的なコーヒーハウスから閉鎖的なクラブへの移行は、コーザーがいうように「最初は人々を結集させたが、発展するにつれて再び人々を切り離れた」⁽¹⁸⁾のである。コーヒーハウスのこのような機能の変化は、新興ブルジョワジー・上流階級の利用者層を中心とする閉鎖的なクラブという「形態」に転化する一方で、庶民のそれはコーヒーよりアルコール類を出す酒房や、食事を中心としたレストランという「形態」に変っていくのである。時代と共に、コーヒーハウスのこのような移り変りは、初期のコーヒーハウスのもつ多様な機能の発展分化とみてよかろう。これらのうち、情報要求、ニュース源としての機能は、既にみてきたようにジャーナリズムの形成に貢献することになる。

多くのコーヒーハウスでは、パンフレットや山積みされた小冊子(tract)のみならずニュースレター(news letter)や、後には多数の新聞が置いてあった。人々はここで各種の情報を入手することができた。また「コーヒーハウス以外の場所で新聞を読むことは可能であったけれども、ずっと不便であった」⁽¹⁹⁾のである。政治的パンフレット、宗教的パンフレット、あるいはデフォーを源流とする批評誌等の流れを継承するジャーナリズム—特に新聞はその発生の時期から政治的要因を含み、極めて討論的性質を有

していたのであり、個人的に読むというより回し読みあるいは討論の資料として利用される傾向が強かった。当時およそ7ペンスであった新聞の価格に対して、コーヒーハウスでわずか1ペニーの貸し賃で入手できたことは、新聞と読者との距離を縮めアクセサビリティを与えたという点で評価されねばならない。実際、新聞は多くの場合30人に輪読されたのであり⁽²⁰⁾、また例えばアディソン (Joseph Addison) のスペテイター誌 (Spectator) 1部は、平均20人にコーヒーハウスで回し読みされたのである⁽²¹⁾。これらの状況はジャーナリズムが、市民生活の代表たるコーヒーハウスの中で、既にある程度の勢力として定着してきたことを意味しよう。18世紀から19世紀にかけての初期の新聞の発展を支えた消費者層は、実はこのコーヒーハウスに代表される当時特有の「場」に集う多くの読者であった。即ちウィリアムズがいうように⁽²²⁾、新聞の初期の歴史における Key は、コーヒーハウスを代表とするコミュニケーションチャンネルで読まれたという事実であった。それは、単行本（主として小説）の大口消費者が、貸し本屋・貸出し図書館というコミュニケーションチャンネルであった関係と類似している。読者と読み物の間にこのようなチャンネルが介存し、一方でまだ大衆の手の届かぬ新聞・雑誌の安定した消費層であるとともに、他方で、“borrowing”の概念を導入してアクセサビリティを近づけたという2面性は重要である。特に新聞の価格が、大衆のリーチ内に達する19世紀末のいわゆる大衆紙の到来まで、コーヒーハウスという「チャンネル」が、新聞・雑誌を大衆の側に接近可能にしたという事実は重要である。

コーヒーハウス同様、新聞・雑誌の普及に少なからず貢献した他のチャンネルは、多くの町や村に点在していた Reading Room であった⁽²³⁾。これは、1820年代に、スミス (W. H. Smith) によって始められ、一週間に150種類もの新聞に接することができたのであった。コーヒーハウスやこの Reading Room のように“borrowing”をシステム化した施設以外にも「非合法に新聞を借りることは、広く浸透していたのである」。⁽²⁴⁾ 例えば、ロンドンの新

聞売り (newsman) は 1 時間に 1 ペニーで、1 日にタイムスの日刊紙を 70~80 回貸したのであった。このような非公式な“borrwing”の方式は、6~12 家族でなる「新聞を読む会 (newspaper society)」を起こし、1821 年には少くともそのようなグループは、5000 グループ程に達したのであった⁽²⁵⁾。“borrowing”のための種々のチャンネル、非公式な“borrowing”の組織の拡がり等により、新聞は着実に日常生活に浸透していったのであった。

コーヒーハウスが、価格というバリアを“borrowing”のシステムにより取り除き、読者層 (特に新聞・雑誌) の形成に重要な役割を果たしたことは、繰り返すまでもなからう。一方、読者層形成に果たしたコーヒーハウスの他の役割も重要である。「身分制約・社会制約から自由であったばかりか政治的自由の場でもあった」⁽²⁶⁾ コーヒーハウスは、既述したようにジャーナリズム出現以前の代用機能を果たしていたわけであり、いわば政治的コミュニケーションの場であった。コーヒーハウスにおけるこのような機能は、そこに集う人々の間に政治意識を目覚めさせていくのに一役買ったのである。当時の読者層形成の積極的なモウティブが、政治的なもの、楽しみや気晴らし的なものに基づいていたことを考えるなら、コーヒーハウスにおけるこのような政治意識・政治への関心の高まりが、ジャーナリズムの読者層の拡大に少なからず貢献したものと思われる。口頭コミュニケーションが大きなウェイトを占めていたコーヒーハウス (話される言葉が、今日における活字が果たすのと同じ程多くの役割を果たしていた…G. M. トレベリアン)⁽²⁷⁾ では、リテライトな者が大声で読み、それを聞く「聴衆 (hearing public) が多数いた」⁽²⁸⁾ ことも忘れてはならない。このような「聴衆」に政治的モウティブが目覚め独学の読者 (self-made reader) に転化していくことは不自然なことではなからう。多くの公式・非公式な“borrowing”システムの普及並びにやがて読者層にいたる多数の聴衆層の存在は、ウェブが言うように「予想される限界以上に、新聞読者層が拡張された」⁽²⁹⁾ ことを表している。

コーヒーハウスという17世紀中葉から19世紀にかけての特有な産物は、このように読者層—特に新聞・雑誌の読者層—の形成に密接な関係があった。コーヒーハウスが“borrowing”のシステムによりアクセサビリティを与える一方、他方でそれはジャーナリズム形成の場として、口頭コミュニケーション、プリントメディアを通して、多くの人々に政治的モウティブや意識を目覚めさせるのに貢献した。コーヒーハウスのこのような2つの重要な役割は、読者層形成との関係からみた場合、特に評価すべき点であろう。

〔註〕

- (1) 「図書館群」という表現に関しては、次節の註(2)を参照されたい。
- (2) イギリスに最初のコーヒーハウスが出現するのは、共和国時代(The Commonwealth of England)である。ロンドンで最初のコーヒーハウスは、トルコ商人 Edwards の召し使い Rasqua Rosse による“Rasqua Rosse’s Inn”—後の有名な“The George and Vulture”であった。次いで Groom の“The Old Rainbow”が現れ、以後続出する。
参照：Cruse, Amy “The Shaping of English Literature” George G. & Company Ltd. 1927. pp. 216—224
Nevill, Ralph “London Clubs ; Their History & Treasures” Chatto & Windus 1911. pp. 17—22
- (3) 角山 栄 “産業革命と民衆” 河出書房新社, 1975.p.95
- (4) Cruse, op. cit., p. 219
- (5) Mitchell, R. J and Leys, M. D. R “A History of London Life” Longmans, 1958.
松村 越訳「ロンドン庶民生活史」みすず書房, 1971. p.135
- (6) Coser, Lewis A. “Men of Ideas, A Sociologist’s view” The Free Press, 1965.
高橋 徹監訳「知識人と社会」培風館, 1970. p.22
- (7) 角山 栄, 前掲書, p.113
- (8) Coser (高橋訳) 前掲書, pp.24—25
- (9) コーヒーハウスにおけるこのような“情報センター”としての機能は注目に値しよう。今日でも世界の海運、海上保険に関する情報のすべてが、ここに集中しているといわれる「Lloyd」の発生は、まさにコーヒーハウスをゆりかごとして育まれてきたのである。既に1700年頃には、海運業に関する情報を

のせた「News」紙を発行し、1734年から“Lloyd’s List”を発行するに至る。その他、株式仲買人や投機的商人のたまり場であり、いわば非公式の株式取引場であった「Jonathan Coffee House」、都市のあらゆる商人の集まる「The Royal Exchange Coffee House」、同様の機能を果たした「The Garraway Coffee House」、「Robin’s Coffee House」、「Virginia Coffee House」等があった。

- (10) Trevelyan, G. R. “Illustrated English Social History : 3” Penguin, 1964. p. 60
- (11) 例えば「Fielding’s England」には新興ブルジョワジーたる shopkeeper たちのある一日が細かくあげられているが、一日のうち3～4回コーヒーハウスに行ったことが示されており、中産階級にとってコーヒーハウスは、まさに娯楽、商談、情報センターの「場」であった。
参照：Taylor, Duncan “Fielding’s England-Living in England” Dennis Dobson, 1966. pp.193—195
- (12) Ashton, T. S. “The Industrial Revolution 1760—1830” 中川敬一郎訳「産業革命」岩波書店, 1973. pp.144—145
- (13) Altick, R. D “The English Common Reader” Univ. of Chicago Press, 1957. p.342
- (14) 角山 栄, 前掲書, p.112
- (15) コーヒーハウスの同質化の傾向は、例えば次のようなものであった。
Whig 党員のよく行く“The St. Jame’s and the Smyrna”. Tory 党員のよく行く“The Chocolate-Tree” or “Ozinda’s”. 法律家の集まる“The Nando’s” or “The Grecian’s”. 良家・貴族の集まる“The Welsh Coffee House”. 軍人の集まる“Old or Young Man’s”. 文学者の“The Percy Coffee House”. スコットランド人の“Forest’s”. フランス人の“Girl’s” or “Old Slaughter’s” 等のコーヒーハウスがあった。
- (16) Cruse, op. cit., p. 224
- (17) 角山 栄, 前掲書, p.113
- (18) Coser (高橋訳) 前掲書, p.26
- (19) Mitchell (松村訳) 前掲書, p.136
- (20) Altick, op. cit., p. 330
- (21) 角山 栄, 前掲書, p.114
- (22) Williams, Raymond “The long Revolution” Penguin, 1961. p. 215
- (23) Webb, R. K “The British Working Class Reader” George Allen Unwin Ltd. 1955. p. 215(コーヒーハウスの中には、労働者のために Reading Room を設けている場合もあった)
- (24) Altick, op. cit., p.323

コーヒーハウス、Reading Room 以外に、非公式な “borrowing” が行われていた“場”として、クラブ(club)、居酒屋(tavern)、パブ(public house)、ビール店 (beer shop)、床屋 (barber) などがあつた。

(25) Ibid., pp. 323—324

18世紀後半、新聞に印紙税がかけられると、新聞を貸し出すことは(1879年の法令により) 違法となり「貸し出しをしていた Reading Room の経営者たちは、法律違反で罰金をとられた」のである(ロンドン庶民生活史, p.137)。このことは逆に広い範囲で新聞の “borrowing” が行われていたことを示していよう。

(26) 角山 栄, 前掲書, p.100

(27) Trevelyan, op. cit., p. 63

(28) Altick, op. cit., p. 330

(29) Webb, op. cit., p. 34

Library と読者層の形成

今日のイギリスにおいて、大衆が本に接しうる有効なルートは、大きく2つ挙げられよう⁽¹⁾。一つは低廉な価格で数多くの作品を提供するペンギンブックスに代表される廉価本シリーズであり、他は全国的なサービスネットワークをもつ公共図書館である。時代を超えて、この2つのルートを本論の対象年代にスライドさせてみるなら、前者は既に前稿第2節で述べたように、多くの大衆啓蒙家あるいは進取的出版人の生み出す廉価本への情熱にその源流をみるのであり、後者はいまだ未分化な形態ながらも、書物を集積し利用に供するという図書館的機能を果たしていた多くのインスティテューションを起点としている。この節でのねらいは、後者即ち前節のコーヒーハウス同様に読者と書物との距離を縮め、アクセサビリティを与えた「場」としての図書館群⁽²⁾に注目し、読者層形成に果たした役割をみてみようとするものである。

18世紀中葉を、ほぼ一つの区切りとして、“Library” の名称のもとに総括される多くの諸施設の共通点は、“borrowing” の概念の導入でありその制度化であつた。この“borrowing” の概念は、読者層の形成という観点から

みた場合特に意味がある。それは、初期の本に必然的に伴う経済的側面のバリア（特に価格面）を実質的に取り除き、アクセサビリティを与えるものであり、かつ「貸し出し—返却」というサーキュレーションシステムを通して1冊の本がいわば複数のコピーの機能を果たし、実質的な接触度を広げたからである。19世紀中葉から末期にかけての公共図書館の出現とその発展、および真に大衆に達する大衆本の到来に至るまで、これらの“borrowing”を制度化した諸施設—図書館群、コーヒーハウス等—のこの時期特有の産物はいわば社会の必然的な「知恵」であったといえよう。

ジャーナリズムを育んできたコーヒーハウスは、その本来の性格から考えて、口頭コミュニケーションによる討論の場ならびに情報交換の場といったさまざまな機能を含んでおり、決して“borrowing”という機能が他に先行するものではなかった。それはジャーナリズムの発展、そこに集う人々の政治意識、情報要求に伴い必然的に生じてくる付随的機能であった。これに対し、“Library”の名称に総称される図書館群では、“borrowing”の概念が先行するものであり、明らかに“意識された対象＝利用者”が前提となっている点に注目されなければならない。このことは18世紀後半から19世紀にかけて、意識された対象—換言するなら消費者層—の拡大をめざし営利を目的とした貸し本屋、貸し出し図書館が増大した事実からもうなずけよう。図書館におけるこの特有の“borrowing”の機能を念頭におきつつ、これらの諸施設が読者層の増大にいかなる役割を果たし、インパクトを与えたかを考察してみたい。

1740年代から19世紀にかけて、この時期の出版物の内容を左右するほどの影響力をもちほぼ全国をおおうほどに発達してくるのが、「貸し出し図書館（ここでは貸し本屋〈circulating library〉も含めた広い意味で用いる）」である。本を貸し出し利潤を得るというシステムが、貸し出し図書館として具体化してくるのは、パミラ（Pamela, or Virtue Revarded）を起点とする商品化された本即ち「小説」が現れてくるのとほぼ一致している。

1740年に出版され一躍リチャードソン (Samuel Richardson) の名を高めたパミラは、イギリスにおける小説の始まりと目されるのであり⁽³⁾、以後多くの作家が続き、18世紀の小説の黄金時代へと至る。これと時を同じくして、ロンドンにおいて最初の貸し出し図書館が、ファンコート (Samuel Fancourt) により始まった(1740年)。これに続いて小説をその主要な商品とするライト (S. Wright) の貸し出し図書館が次々と現れる。18世紀の文学が機知を重んじ、自然・叙情趣味の薄い都会的なものであったことを考えれば⁽⁴⁾、当時第一級の大都市であったロンドンにおける貸し出し図書館の出現はほぼ小説の確立期と一致していると捉えてもよからう。

しかし注意を要しなければならない点は、本をレンタルするというシステムは既に17世紀にロンドンの書籍業者が、彼らのもつストックを一部貸し出す習慣を作っていた⁽⁵⁾のであり、王政復古当時の新聞広告にも書籍商カーマンの広告 (“Lent to read”) が掲載されていたことから明らかのように⁽⁶⁾、17世紀に既にその前史があった。また、ロンドンで貸し出し図書館が発達する以前に、これらの施設は地方一主として保養地として栄えたバース (Bath)、サザンプトン (Southampton) 一で普及したのであった。

「保養地、温泉場での貸し出し図書館は、いわば“憩いの場”であり」、⁽⁷⁾ 娯楽、気晴らしの一環としての読書が提供されたのであった。保養地におけるこのような発展は、貸し出し図書館が当初から、娯楽、余暇、楽しみに基づくモウティブに対応する機能をも有した施設であったことを示している。

営利を目的とした貸し出し図書館の発展に伴い、「常時新しい商品を並べて置くために、当然のことながらかつてないほどの小説の量産が求められる」⁽⁸⁾ことになる。前稿第1節でみてきたように、貸し出し図書館と出版者とは相補う立場となってくるのであり、「互いの利益とモノポリーの維持⁽⁹⁾」という点で、利害が一致するのである。すなわち出版界の送り出す大量の本 (主として小説) の大口消費者としての役割を果たす一方で、その購入

した本を“borrowing”のシステムにより安い貸し賃で流通させ利潤をあげると共に、アクセサビリティを縮める役割を果たしたのである。

貸し出し図書館の発達はめざましく18世紀末期には、副業で営まれた貸本屋まで含めるとおおよそ1000館に達し⁽¹⁰⁾、より多くのアクセサビリティを与えることになる。この時期18世紀から19世紀にかけては、対仏戦争による種々の重税の負担、紙税の上昇、これらに伴う本の価格の上昇といった「本」を取り巻く状況の悪化は、書籍購入者層を一段と限定し“borrowing化”へと押し進めたものと考えられる。加えて、これら多くの貸し出し図書館の普及は、一層そのような状況に拍車をかけた。

初期のロンドンの貸し出し図書館の流れをくむベルの図書館(Bell's British Library)は1787年迄に10万冊もの蔵書を有し、まさに今日的視点で図書館と呼びうるまでに成長してくる。貸し出し図書館のこのような成長を支えたのは、主として中産階級の女性読者層であった。女性読者の増大は、産業革命による商業の発展、中産階級の社会的地位の向上、経済力の向上等に伴う「余暇」の増大によるものであった。さらに初期の小説が極めて教訓的なものであり、礼儀作法のテキスト的性格が強かったので、新興クラスの上流クラスへの上昇志向や模倣とあいまって、「読書」という上品な行為に走るものも自然なことであった。すなわち従来主として消費面をつかさどっていた女性が、帰属クラスの上昇と共に、生活空間での余暇の拡張という新たな現象に出会い、「一家が獲得した新しい地位にふさわしい行動様式を定める」⁽¹¹⁾のが、女性の任務となったのであり、そのガイドラインとしての役割を果たすものとして求められたのが“小説”であった。

中産階級の女性を読者層に転化せしめた直接の要因は、安い貸し賃による本へのアクセサビリティが高まったことである。一般に貸し出し図書館の貸し賃は2通りあり、年間通しの場合と貸し出す毎に支払う方式とがあった。前者は年間半ギニー～12シリング、1シーズンで3～5シリング、1ヵ月だけの場合1シリング6ペンス～2シリングであった。⁽¹²⁾この貸し

賃が「安い」という基準は、書物の定価と比較した場合にいえることであり、大衆の書籍購入力である週1～2ペンスというレベルからみるなら、その貸し賃ですら大衆には依然高かったといえよう。逆に言えば、貸し出し図書館は年間半ギニーの貸し賃を払える層にのみ利用者を限定することになったのである。小説を中心とする本の大口消費者であった貸し出し図書館は、既述したように出版者と互いの利益やモノポリの維持という点で結びついたのであり、商業ベースにのるにつれて書籍の価格の設定を高く維持し全体的な読者層の拡張を制限する傾向にあった。貸し出し図書館の存在は、読者の購買力と本の価格とがかけ離れている場合にその存立意義があるのであり、その落差をうまくつなぐ“媒介的”役割が課せられていたのである。従って当時人気があり流行した小説を中心とする3冊本(three-decker volumes)⁽¹³⁾らの価格設定を高く維持し、直接購入者層を制限する反面、営利組織としてその対象である“borrowing”層を増大させ、自らの傘下におさめ集中化する傾向があったといえよう。

貸し出し図書館のこのような傾向は、19世紀半ばのムーディ(Charles Edward Mudie)の画期的な成功によって例示されよう。ムーディの貸し出し図書館(Select Lending Libraries, 1842年)において、人々は当時の「エリート層しか入手できなかった大型の美しい扇表紙の3部冊(3冊本シリーズ)の小説に接することができた」⁽¹⁴⁾のである。従来の貸し出し図書館に転機をもたらし、やがて全国的なシステムとなるムーディの図書館の成功は、広範な広告活動、大量の新しい大衆本の導入、安い貸し賃、道徳的に問題のある本の排除等によるものであった。また独自のサービス手段として、数箱に詰めた本を馬車によりメンバーに送るサービス網があったことも大きな要因であった。ムーディに続く大規模な貸し出し図書館の隆盛は⁽¹⁵⁾、基本的には当時流行の3冊本の全盛と歩調をあわせているといえよう。貸し出し図書館の発展の中心となるひとつの原理は、それが発生期から商品化された文学即ち小説の発達と軌を一にしていることである。

ちょうどジャーナリズムにおいて、コーヒーハウスが果たした同様の役割を、文学においてそれは果たしている。作家、読者、出版者を三位一体としてつないだものが、これら貸し出し図書館というコミュニケーションチャンネルであった。利用者や販路の拡大をめざす貸し出し図書館から出版者への圧迫が、小説を中心とする書籍の拡大再生産を促し流行書を生み出し多くの小説を登場させることになる。中産階級の女性読者の道徳、礼儀、作法等の手引きとしてのモウティブあるいは真に自分のものとなった余暇の中で娯楽的モウティブ等が小説を支えるものとなり、貸し出し図書館と小説は両者一体となって発展していくのである。このことは貸し出し図書館がその商業ベースを強め、その商品たる本を流通させるために、必然的に読者の欲するものに主商品が向けられるようになることを意味している。その結果、純文学の崩壊を暗示するセンセーショナルリズムの傾向が強まったのである。貸し出し図書館のこのような傾向と、そこに群がる大量の読者を評して、かのアンソニー、アブソルート (Sir. Anthony Absolute) は「町の貸本屋 (貸し出し図書館) は、枯れることのなき悪の知識の木である (A circulating library in a town is an evergreen tree of diabolical knowledge)」⁽¹⁶⁾と述べたのであった。

貸し出し図書館が小説という新しいジャンルを切り開く一因となりそれに伴う読者層を開拓していった点は、やはり評価されるべきであろう。大衆レベルから見て比較的高めに設定されていたその貸し賃と、そこで扱われている主商品が小説であったという事実から利用者が一般大衆ではなく主として中産階級に限定されていた事実は認めざるをえないが、大衆読者層の先導的役割を果たしたという意味において、これら中産階級—特に女性読者層—の拡大とそれを促した貸し出し図書館の発展は大きな意義がある。

一方、18世紀から19世紀にかけて発展した他の形態の「Library」、「Readingのためのチャンネル」にも注目されなければならない。これらの代表的なも

のがブッククラブ(Book Club)および会員制図書館(Subscription Library)である。貸し出し図書館(貸本屋)が、営利を目的とした一種の企業であり不特定多数の利用者を対象としていたのに対し、これらブッククラブや会員制図書館は、直接的な営利を目的としたものではなく、その構成員の共同出資による本の購入・共同運営といった何らかの形で、その施設に構成員が参加し意志が相応に反映されていた点が異なる。

貸し出し図書館にやや遅れて、1740年代後半から50年代にかけて現れた会員制図書館は世紀末までには多数に達する。書物の購入、運営費・建物の維持のために、メンバーは図書館の株を購入し、その経営者の一員となるようになった。多くの場合入会金はそのまま「株」であり、入会と同時に株主となった(多くは1ギニーであり、その他会費として6~10シリング納める義務があった)。当初、会費を出しあって共同で書籍を購入し、回し読みをするというシステムの会員制図書館は、19世紀に入り大きく発展する⁽¹⁷⁾。しかしこのような会員制図書館が、大衆読者層の形成に貢献したとみなすのは難しい。共同で運営していくための資金の裏付けが必要であったこと、およびややもすると貸し出し図書館より高い入会金や会費という経済的負担があったことを考えれば、その理由も推察できよう。実際、労働者向けの会員制図書館もあったが、その多くは資金難のため短命であった。大衆読者層の形成に貢献したと思われるものは、会員制図書館よりもむしろブッククラブであった。

H・ブルーアムは、経済的に恵まれぬ人々が本を入手する手段として、廉価本の普及と貸し出し図書館による方法を提示し、後者の手段よりもさらに有効な方法としてブッククラブをあげている。すなわち「ブッククラブあるいは読書協会の方が、はるかにもっと労働している諸階級には適しているし、きわめて少数の出資者で設立されうるし、またわずかな基金しか必要としないだろう…」⁽¹⁸⁾と。会員制図書館を小型化したような形態のブッククラブは、運営、資金等において容易に組織できたため、中産階級は

もとより「下層階級のまじめな人々の間にも普及した」⁽¹⁹⁾のであった。ブッククラブに含まれるこのような大衆性を理解するためには、同じ範疇とみられる会員制図書館との基本的相違点をみることによって明らかにされよう。カウフマン (P. Kaufman) は「最も基本的な相違点は、定期的な会合（一般に月に一回）を行うか否かである」⁽²⁰⁾と述べている。ブッククラブでは、全メンバーが毎月会合を開き、そこで運営・選書といった事項を決定し討論したのであり、コーヒーハウス同様民主的雰囲気が残されていた。⁽²¹⁾

ブッククラブの起源は、18世紀初め頃僧侶たちの間にみられ、1710～20年代にかけて出現してくる⁽²²⁾。18世紀中頃に急増し、19世紀の初めには“6500”数にも達し3万家族に貢献したといわれる⁽²³⁾。これらブッククラブで読まれた本は、主として政治に関するものでありペイン (Paine) あるいらバーク (Burke) らのものが読まれ、同時に定期刊行物 (新聞、雑誌) も普及していた。その他パンフレットの類、政治論文等があった。カウフマンが言うように「ブッククラブにおける主な関心は、当時の政治状況であった」⁽²⁴⁾のである。それはちょうどコーヒーハウスに集う人々が、政治的関心に基づいて討論したり、競って新聞を読んだ状況とよく似ている。政治的関心に基づく読者の多くは、生活と密着した内的必然性によるモウティブが高く、積極的な読者層に転じやすかったことを考えれば、コーヒーハウス同様ブッククラブの読者層は大衆読者層形成の一端を担っていたのである。また政治的、社会的な読み物が多数を占めていたのに対し、宗教関係の書物が少なかった点に注意しなければならない。これはブッククラブの運営方式を考えてみれば明らかなことである。すなわち選書の決議は構成員の多数決により決定されるのであり、裏を返せば当時のブッククラブの読者層は、宗教的な読み物を志向しなかったことの反映といえよう。前節でみてきたコーヒーハウスおよびこのブッククラブというこの時期特有のコミュニケーションチャンネルを通して、多くの政治的モウティブをもつ読者層

が育まれてきたことは大いに評価すべきであろう。それは、カウフマンが言うように「ブッククラブは、主要な政治的改革の表現としてあるいは社会進歩をすすめる強い意見の中心であった」⁽²⁵⁾とまで極言できなくても、読者層形成の主要なモウティブである政治意識の形成に貢献した点は認めなくてはならない⁽²⁶⁾。

この他、この時期に“Library”のもとに総称される種々の図書館—寺院図書館⁽²⁷⁾、教区図書館⁽²⁸⁾、地方の邸宅には必ずあった個人文庫⁽²⁹⁾、ブラウン (Samuel Brown) によって始められた画期的な配送システムの巡回図書館⁽³⁰⁾等—があったが⁽³¹⁾、大衆読者層形成という観点から重視しなければならないのは、1850年の公共図書館法をもって成立する公共図書館の出現である。貸し出し図書館、会員制図書館等によって行われていた“borrowing”のシステムが、ここにおいて「正式」に制度化される。読者層の増大に大きく貢献すると期待された公共図書館は、初期の段階においては必ずしも効果があったわけではない。なぜなら読み物自体が安くなり大衆に接近している時に出現したタイミングの悪さ、新しい未経験の公共事業の分野であったこと、資金不足、SDUKのような全国的組織がなかった事等の状況があったからである。

18世紀および19世紀頃までの公共図書館出現以前に、実質的に機能してきた図書館群は今まで見てきたように大きく2つのグループ—貸し出し図書館（貸本屋）および会員制図書館・ブッククラブ—に代表されよう。貸し出し図書館は、商業ベースにより資本の論理を貫き発達するにつれて、販路たる利用者即ち読者層を開拓した。それは小説の発達と密接な関係にあり、小説の大衆化を促し読者—主として中産階級の女性読者層—を拡大した。営利を目的としたこのような施設は、いわゆる“有閑階級”となった新興クラスの女性読者層の楽しみとしての読書、礼儀作法の手引きとしての読書、余暇としての読書といったモウティブと相互に関係したのである。

これに対し、ブッククラブや会員制図書館は読者の側からの積極的なモウティブによって生み出された施設であったという点に注目しなければならない。この点こそ貸し出し図書館と決定的に異なるのである。特にブッククラブは、主として政治的モウティブをもつ読者から構成されていたのであり、コーヒーハウスと共にこの時代のアクティブリーダーを育む“場”であった。読者層形成の重要なモウティブである娯乐的志向と政治的志向という大きな要因が、この時期の代表的な読書のための施設を支える“エネルギー”となっていたのである。即ち「貸し出し図書館は特に小説への要求を刺激する一方で、ブッククラブは時代性を反映する読み物—特に政治・社会問題関係の読み物への要求を刺激した」⁽³²⁾のである。

貸し出し図書館が大衆読者層形成の引き金となる中産階級の女性読者層の拡大をもたらし、やがて大衆に波及させていく一方で、ブッククラブがコーヒーハウス同様下からの要求—特に政治的関心—に基づく読者層を生み出し育ててきた点を繰り返し評価したい。

おわりに

前稿並びに本稿でとりあげた読者層形成の「場」としての3施設についての簡単な分類表を作ってみた(図1)。共に“borrowing”の概念を導入したこれらの諸施設にもそれぞれ固有の特性があったことがわかる。Libraryとかブッククラブという比較的めだたない分野が実は当時のマスコミュニケーションの受け手の重要なチャネルの役割を果たしていた事実は、社会史、マスコミュニケーション史的に注目されるところである。

図 1

	Communication	Motive	Class	Member
Coffee House	oral	political	working class	group
Book Club	print-media	political	working class	group
Circulating Library	print-media	leisure and manners	middle class	individual

本稿は、前稿に続いて読者層研究という極めて特殊な研究分野に焦点をあてたものである。その本来の意図は、マスコミュニケーション研究の3領域—すなわち Shannon のコミュニケーションモデル〈情報源・送り手→メッセージ→受け手・到達地点〉で見た場合の受け手研究に相応しよう。マスメディア論を中心とした近年の送り手ならびにメッセージ論研究主流の中で、受け手研究は途についたばかりで研究成果は比較的少ない⁽³³⁾。さらに、社会経済史的視点から捉えようとする試みとなると数えるにすぎない。読者層研究は、元来英文学における作家論に付随した読者論としてすすめられてきた。従って、ここでは社会科学あるいは歴史学のような実証性を重んじる研究方法というよりはむしろ文学論の一環としての位置づけが大きかった。我国でもこの流れを踏襲している傾向が強い⁽³⁴⁾。

しかし本稿ならびに前稿でのアプローチは、いささか趣を異にしている。今日あらゆる階層が有しごく当然の行為である「読み能力」は、マスコミュニケーションの胎動期には社会的、経済的および教育的状況ゆえに一部の階層に限定されていたのであった。それゆえリテラシーが広く社会の底辺にまで到達していくプロセスに注目することは、来るべきマスコミュニケーション時代に必須の大規模な受け手層の出現プロセスならびに何人も有している「基本的権利としての読み能力」の思想の拡がりに注目することを表している。ゆえに前稿並びに本稿の視点を貫いたのは、一般大衆の権利としての読み能力の拡大のプロセスであり、その意味で大衆文化論の一環として位置づけられるものである。

〔註〕

- (1) 実際の大衆の余暇活動を調査し、入念に分析した Lavers らの見解に従った。
参照：Lavers, G. R. and Rowntree, B. Seebohm "English Life and Leisure" Longman's Green & Co. 1952
特に, Chap. XI "Reading habits" pp. 286—314.
- (2) ここで言う“図書館群”とは、公共図書館以前に存在した“Library”の名称のもとに包括される一連の諸施設—貸し出し図書館、会員制図書館、巡回図書館およびブッククラブ等の類似の施設—を指すものとする。
- (3) 小説の起点をこの“Pamela”とするかあるいは Dafoe, Swift にまでさかのぼるかは、英文学上の論争であり別の問題を提起するが、ここでは一応前者をその起点とする。
- (4) 朱牟田夏雄（等）“イギリス文学史”東京大学出版会、1955. p.104
- (5) Ollefla, James G. "Library History" Clive Bingely p.33
- (6) Hamlyn, Hilda M. "Eighteenth-century circulating libraries in England" The Library. Ser. 5—1 (1946—47) p. 197
- (7) Margetson, Stella "Leisure and Pleasure in the Nineteenth Century in England" Cassel, 1969 p. 87
- (8) 香内三郎“近代大衆文化の形成と印刷”Energy Vol. 10, No. 3 p. 17
- (9) Pollard, A, W, "Commercial circulating libraries and price of books" The Library. Ser, 4 IX. No.4 1929. p.412
- (10) Ollefla, op. cit., p. 33
- (11) Coser, Lewis A. 高橋 徹監訳「知識と社会」培風館、1970. p.41
- (12) 具体的にみてみると、Fancourt の図書館は年1ギニー、Wright のは年16s. これに対し J. Rowlands のは年15s (1742) であったが、それから数年後一般に年10s, 6d. quaterly で3s. に下がり、1760年代後半から再び12s. に上がった。Bath では Circulating Library 間の協定があり、1789年まで年半ギニーに統一されていた。
参照：Hamlyn, op. cit., pp. 180—184
- (13) 一般に当時この three-decker volumes は、各巻10s, 6d. が普通であった。
- (14) Margetson, op. cit., pp. 141—142
- (15) この Mudie の図書館を始め、Smith's, Boot's, The Time's らの貸し出し図書館が栄えた。
- (16) Cruse, Amy "The Shaping of English Literature" George G. Harrap & Company Ltd, 1927. p. 272
- (17) 具体例をあげると
リパブル会員制図書館 (21,400冊—1830年), Hull's (21,000冊—1849年),

Manchester's (20,000冊), Norwich (14,000冊) …etc.

会員制図書館の典型的なものは、植民地時代のアメリカで Benjamin Franklin によって創設されたフィラデルフィア図書館会社 (Library Company of Philadelphia) に見い出すことができる。

- (18) Broughm, Henry "Practical Observation upon the Education of the People, addressed to the working class and their employers" London, 1825.

“人々の教育についての実際的観察”「イギリス民衆教育論」明治図書, 1970. p.124

- (19) Altick, Richard D. "The English Common Reader" The Univ. of Chicago Press 1957 p. 218

- (20) Kaufman, Paul "English Book Clubs and Their Role in Social History" Libri. Vol. 14 1964. p. 24

- (21) さらに相違点として、ブッククラブは一般に構成員が少なく20~30人程度であったこと、会員制図書館のごとく永続的な書物をもたず役割を果たすと、会員の間で分配されるか売りに出されたこと、ブッククラブでの出席は義務づけられており欠席すると罰せられた点…などがある。

- (22) 1712年—Caxton の "Book Club", 1724年—Leicesteshire の "Book Society", 1725年—Essex の Colchester の "Castle Society Book Club"らが現れた。

- (23) Altick, op. cit., p. 218

尚, Kaufman はこの数値がやや誇張としながらも、これら多数のブッククラブの存在が、出版界に大きな刺激を与えたと述べている。

参照: Kaufman, Paul "A Bookseller's Record of Eighteenth-Century Book Club" The Library. Vol. XV No. 4 1960. p. 278

- (24) Kaufman (English Book Club and Their Role) op. cit., p. 9

- (25) Ibid., p. 27

- (26) ブッククラブと同様の機能を果たした関連施設として以下のものがあつた。最も類似している The Magazine and Newspaper Club, Luna Society を先駆とする文学哲学の会 (The Literary and Philosophical Societies), その他。

- (27) 寺院図書館の歴史は古いが、18世紀においても依然利用者の中心は僧侶であり、蔵書も宗教関係が中心であり貸し出しされる本の $\frac{1}{2}$ は宗教書であつた。その他の本も未だに“古典中心”であつた。

参照: Kaufman, Paul "Reading Vogue at English Cathedral Libraries of the Eighteenth Century" Bulletin of the New York Public Library. Dec. 1963. pp. 643—667

- (28) 教区図書館 (parish library) は、既に17世紀から存在し、主として僧侶を対象としていた。
- (29) Trevelyan, G. M. "Illustrated English Social History: 3" 1964. p. 205
Cole は18世紀アイルランドにおける個人文庫について膨大な資料をもとに、198人の個人文庫所有者について調査し、所有者と階層、職業との関連、所有されている本の内容等について吟味している。その結果、個人文庫の所有者は、一部の宗教関係者 (牧師等) を除いて upper class に属していたことが報告されている。
参照: Cole, Richard C. "Private Libraries in Eighteenth-Century Ireland" *Library Quarterly*, Vol. 44 No. 3 pp. 231—247
- (30) Samuel Brown によって作られた巡回図書館 (Itinerating Library) は、1817年 East Lothian 州で始まった。1825年には、それぞれ500冊をもつ19の巡回図書館をもっており、その図書館はさまざまな決められた基地を回り、それぞれの所に一定期間滞在した。「この画期的なシステムは、一部の教育改革者の注目を引いた」のであった。
参照: Webb, R, K, "The British Working Class Reader" George Allen & Unwin Ltd. 1955. p. 66
- (31) ここでは省いたが、職工学校図書館の果たした役割も無視できない。すなわち1850年当時610館もの職工学校図書館は、総計70万冊を有し、年間182万冊を circulate させたのであった。例えば Liverpool's Mechanics Institute Library (15,000冊), Manchester's (13,000冊), Newcastle's (8,500冊) 等大規模な職工学校図書館があった。
- (32) Kaufman (*English Book Clubs and Their Role*), op. cit., p. 27
- (33) このような事情は近年読者層研究の集大成をなしたアルティック (R. D. Altick) の「消費者としての読者の役割に関する研究は、長い間無視されてきた」という言葉に象徴されよう。
参照: Altick, op. cit., p. 8
- (34) 代表的なものに英文学者である外山滋比古氏による以下の著作があげられる。
「近代読者論」 みすず書房 1968.
「修辭的残像」 みすず書房 1969.
ここでは英文学的視点から作家論に対する読者論としての位置づけがなされている。